2019.10.13　　「私たちはキリストのからだ、ひとりひとりは各器官」　　第一コリ 12:12-31

先週私たちは、「イエスを主」と信じる者には、御霊とその賜物が与えられていることを見ました。そこには、９つの御霊の現れが記されていたわけですが、そのようにして主を信じる者にそれぞれ賜物が与えられる理由、それは「みなの益となるため」、つまり、教会が建て上げられるためです。ですから、主イエスへの信仰をもっている者は、「自分には御霊が与えられていない。その賜物を受けていない」と言ってはいけません。むしろ、与えられていると信じることで、主への奉仕へと向かうべきです。主は、そのように「みなの益」となるために、進んで主に仕える者に、御霊の現れ、その力をもって臨んで下さるのです。

12-13 節「ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです」。

パウロはここで、「からだ」という概念を用いて、主にあって御霊を受けた者がみな、「一つのからだ」としてのキリストに属する者とされたこと、そして、おのおのにはからだの部分として、御霊の賜物がそれぞれ与えられることを説明しています。ここでも「一つのからだとなるように」、「一つの御霊によって」「一つの御霊を飲む者とされたから」と、「一つ」ということが強調されているわけですが、それはコリント教会の現実、つまり、彼らのうちにあった分派、分裂、争いといった問題が意識されてのことだと思います。そして、そういった問題は、どの時代、どこにおいても、教会の抱える課題と言えるでしょう。それゆえに、私たちもまた、この「一つ」ということを、しっかりと受け留めたいと思います。

14-19 節「確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。15 たとい、足が、『私は手ではないから、からだに属さない』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。16 たとい、耳が、『私は目ではないから、からだに属さない』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。17 もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょう。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょう。18 しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。19 もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょう」。

このところでパウロは、私たちのからだが、一つの器官ではなく、多くの器官から成っているように、キリストのからだである教会も、多くの器官から成っているといいます。この「器官」とは、英語では Member です。ここから教会員のことをメンバー、また教会籍のことをメンバーシップといったりします。もちろん、私たちは、自分のからだが耳だけはないこと、また目だけでないことを知っているのです。そして、それがあまりに当たり前すぎで、「なぜそうなのか？」と問う人はほとんどいないと思います。でも、パウロは言うのです。「神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えて下さったのです」と。

私たちのからだが、多くの部分から成っているように、キリストのからだも、多くの器官（メンバー）から成っています。そして、それは実に神様のみこころによるのです。主ご自身が、そのようにからだの中にそれぞれの器官を備えて下さったからです。ですから、互いの間に違いがあるのは当然のことで、それを分裂や争いの原因としてはならず、また自分の賜物を他者と比較することで、「自分は劣っているから、からだには属さない」と自己卑下してもいけません。というのも、コリント教会には、自分に与えられた賜物をもって誇り、高ぶる人がいれば、反対に自分を卑下する人もいたようです。でも、からだの中にそれぞれの器官を備えられたのは神様であって、主は、それぞれの器官が自分に与えられた役割を果たすことを求めておられます。

20−21 節「しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。21 そこで、目が手に向かって、『私はあなたを必要としない』と言うことはできないし、頭が足に向かって、『私はあなたを必要としない』と言うこともできません」。では、それぞれの器官は、単独で存在できるものですか？それらは、からだにつながっていてこそ生きたものです。ですから、目が手に向かって「私はあなたを必要としない」とは言えないし、また頭が足に向かって「私はあなたを必要としない」とも言えません。同様に、私たちも互いに対して「私はあなたを必要としない」とは言えないのです。「一つの、同じからだ」に属しているからです。

でも、コリント教会の現実はどうでしたか？「私は誰々につく」ということで、彼らのうちには分派の問題がありました。そのように争うことは、互いに対して「私はあなたを必要としない」ということではないですか？またある人が、不品行の罪を犯した時、それをそのままにしておくこと、つまり、その無関心さは「私はあなたを必要としない」というのと同じことではないでしょうか？さらに、そこにつまずきが起こる可能性を知りながら、でも他者のためではなく、自分自身のために偶像にささげた肉を食べるようなことがあるならば、それは「私はあなたを必要としない」ということではないですか？教会の集まる目的、それは「主の晩餐」にあずかることで、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるため、とパウロはいいました。でも、それを自分勝手に食事をする機会とし、教会の中で貧富の差による分裂を起こすような人がいるなら、その人は、他者に向かって「私はあなたを必要としない」ということではないですか？

からだの中に器官は多くあっても、からだは一つです。それゆえに、私たちは互いに対して「私はあなたを必要としない」とは言えません。でも、それで終わらないのです。22-26 節「それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。23 また、私たちは、からだの中で比較的に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、24 かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです」。

「からだの中で比較的に弱いと見える器官」、また「見ばえのしない器官」とは、どこのことですか？ここでは具体的な例はあげられていないので、実際の所はわかりません。それが外側に見える器官だけを指しているのか、それとも外からは見えない内臓なども含まれているのか…。いずれにせよ、普段はあまり注目されない部分を指しているのは明らかです。一般的には、目に見えるところで、「手がキレイとか、足の形が良いとか、目が大きいとか、耳の形が良いとか、頭の形がいい」などと言ったりしますが、仮に、ここでパウロがあげている「手、足、目、耳、頭」をかっこうの良い器官とし、それ以外を見ばえのしない器官とするなら、どうですか？その弱いと見られる器官、見ばえのしない器官は、すべてからだから切り離しても良いですか？

パウロはいいます。「からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものです」。なぜそうなんですか？それは神様が、そのように劣ったところをことさらに尊ぶことで、からだを調和させて下さったからです。その調和とは、消極的に表現すると「からだの中に分裂がないこと」であり、積極的に表現するなら「各部分が互いにいたわり合うこと」といえます。からだの中にそのような調和があるなら、そこで一つの部分が苦しむ場合、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれるなら、すべての部分がともに喜ぶのです。皆さんは、これまでコリント教会を見て来る中で、彼らのうちにそのような調和を見ますか？また、私たちの教会のうちには、そのような調和が見られるでしょうか？

私たちはみな、一つのキリストのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされました。主イエスを主と告白する者はみな、それぞれが御霊によって主と一つにされることで、互いに対しても一つとされているのです。ですから、パウロは 27 節でこう言います。27 節「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです」と。このことを知るならば、パウロがこの後、「神様が教会の中で人々をそれぞれ任命された」ということも理解できると思います。

28-30 節「そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行う者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者などです。29 みなが使徒でしょうか。みなが預言者でしょうか。みなが教師でしょうか。みなが奇蹟を行う者でしょうか。30 みながいやしの賜物を持っているでしょうか。みなが異言を語るでしょうか。みなが解き明かしをするでしょうか」。

パウロは、前回のところで、御霊の現れとして、知恵のことば、知識のことば、信仰、いやしの賜物、奇蹟を行う力、預言、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力について語りました。そして、私たちは自分に与えられた賜物をもって主に仕えるわけですから、主の任命と御霊の賜物とは当然、深く関係しているのです。

ところが、パウロは「だから、あなたがたは、その主からの任命と自分に与えられた御霊の賜物をもって、主に仕えなさい」といって、これまで語ってきたことをまとめることはしません。31 節「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。また私は、さらにまさる道を示してあげましょう」。「よりすぐれた賜物」とは、英語では、“Higher Gifts”(ESV)“Greater Gifts”(NIV)と訳され、「より（一層）大きい賜物」と訳すこともできます。そうすると、「やはりそこにはすぐれた賜物と、そうでないものとがある」と理解されるかも知れません。ここは実際に解釈の難しいところです。

すでに見ましたが、コリント教会の状況を考えると、そこでは、ある人々はその賜物ゆえに高慢になり、またある人々は自分の賜物が他の人よりも劣ると自己卑下していたといいます。そのことを考えるなら、パウロがここで「よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい」といった時、それは高慢な者には、それによって謙遜になることを教えていると理解できますし、また自己卑下する者には、自己卑下ではなく、主に熱心に求めることで、自分の願う、より大きな賜物を与えてもらうよう、励ましているとも理解できます。いずれにせよ、主イエス以外には、完全な人はいないのですから、すべての信仰者にとって、自分が主に似た者へと変えられるため、またからだの器官としてますます仕えることができるために、必要な助け、力を主に熱心に求めることは、当然のことです。

もちろん、手は目にはなられませんし、足は耳にはなれません。そういう意味で、各器官は自分に与えられた役割を主の助けとしての御霊の賜物を用いて行っていくことが大切です。ただ、そこに向かう態度としては、自分の益だけを考えるのではなく、みなの益、つまり、からだ全体のことをいつも心に留めるべきです。それによって、からだの頭（かしら）であるキリストと、それぞれの器官である隣人（兄弟姉妹）とを愛するためです。この部分が欠ける時、それぞれの器官がいくら健康であっても、からだは不健康となります。パウロが、「また私は、さらにまさる道を示してあげましょう」と言った後、「愛の章」として知られる 13 章を記したのはそのためではないでしょうか？

皆さん、いかがですか？今日、あなたは主イエスを主と信じておられますか？その主への信仰のゆえに、一つの御霊によってバプテスマを受け、一つの御霊を飲む者とされましたか？そうであるならば、あなたは一つのからだとしてのキリストのからだに属する者、その器官です。あなたの存在目的は、もはやあなた自身にではなく、からだ全体にかかっています。ですから、自分さえ見栄えが良く、健康であれば、それで良いわけではないのです。互いにいたわり、補い合うことで、からだ全体が健康になるために私たちは存在しています。

私たちの主が、神のあり方を捨て、人となってこの世に来て下さったのは、実にそのためです。主が、十字架にかかり、ご自身のいのちという代価をもって贖われたのは、あなたや私だけではありません。ここにおられるみなを、すべての罪人を贖うために、主はご自身のいのちをささえげて下さったのです。それは、ご自分を信じる者が、信仰により、またバプテスマを通して主の死と復活のいのちにあずかることで、主と一つにされるため、つまり、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、みな一つのからだとなるためです。私たちは一つのからだであるゆえに、互いにいたわり、補い合います。かしらであるキリストが、ご自身のからだを、その器官である私たちを愛し、養っていて下さるからです。そして、主は、そのようにしてご自分のからだに属し、その器官となったすべての者を終わりの日に完全に贖って下さいます。ご自分のおられるところ、つまり、天の御国にご自身のからだである私たち教会を迎え入れることは、当然のことだからです。